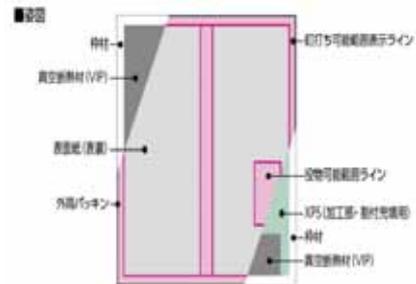


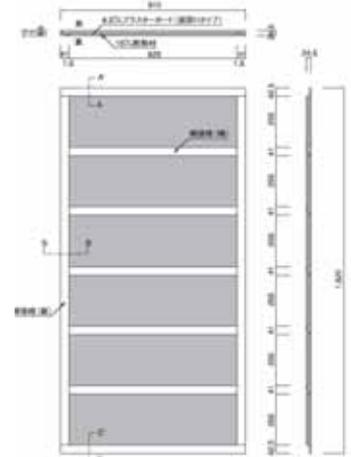
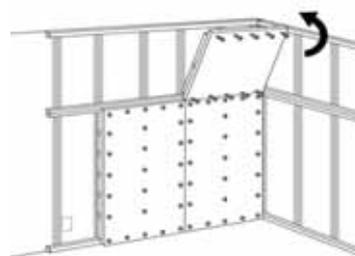
最終更新日 H24.10.24

改修技術 No. 12101206

性能分野	環境・省エネルギー性能
大分類	断熱性の向上
中分類	躯体の断熱性の向上 / 外壁の断熱性の向上
技術の名称	内断熱工法（内張り断熱工法、かぶせ工法）
改修技術の概要	<p>【改修工事の主な内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> 外壁の室内側に断熱層を設けることにより冷暖房エネルギー、室温変化、結露および結露によるカビの発生を低減する。既存の室内仕上げの上から、かぶせ工法となるため解体工事が不要で工期が短く、室ごとに施工できるため、居ながら工事が可能。室面積の減少をできるだけ少なくするため、薄くても高い断熱性を有する断熱材が必要となる。 <p>【各工法の特徴】</p> <p>真空断熱材内張り工法（かぶせ工法）</p> <ul style="list-style-type: none"> 繊維系断熱材等を心材としてアルミライナー材等でパッキング、内部を真空状態にしてパネル化した断熱材を室内既存壁の上から施工する工法。冷蔵庫等で使用される真空断熱材を建築用に改良した新しい工法。 厚さ 12mm の真空断熱材で発泡ウレタン 200mm と同程度の断熱性能を有するものもある。 仕上げ材に石膏ボード+クロス張りを用いても既存壁より 25mm 程度の仕上げ厚で納まる。 真空断熱材は、釘の打ち抜きまたは画鋸（壁にポスターなどを貼る場合）などで容易に断熱性能を失うため施工中施工後も取扱いには注意を要する。 現場加工ができず、モジュールによる割り付けとなるため現場採寸が必要、コンセント、スイッチパネル、エアコン取付け廻りは、プラスチック系断熱材を使用する。 胴縁との隙間をなくし釘止めができるように断熱性胴縁と一体化したパネルが開発されている。 床用の真空断熱材も開発されている。 複雑な室形状では断熱材が壁面に追従できないため、適用できない場合がある。 寒冷地では、導入できない場合がある。 <p>発泡プラスチック系断熱材複合パネル内張り工法（かぶせ工法）</p> <ul style="list-style-type: none"> 発泡プラスチック系断熱材と石膏ボードの複合パネルを室内既存壁の上から施工する工法。木材等により補強されている。クロス張り等で仕上げる。 真空断熱材より断熱性能は劣るが、既存壁より 25mm 程度のふけ代で納まり、現場でカット加工ができ、同じ断熱材で統一して施工できる。 メーカーによっては、開放型ストーブの使用は禁止（結露しやすくなるため）している。 複雑な室形状では断熱材が壁面に追従できないため、適用できない場合がある。 寒冷地では、導入できない場合がある。



< 出典：(株)LIXIL >



< 出典：(株)ウッドワン >

